

開催実現、これを機会に静岡、愛知両県琵琶人の距離が接近し今後益々発展の一資ともならば望外の幸いである。(通信)

桑名洲聖リサイタル

四月十五日(出)朝十時東京渋谷東邦生命ホール(千円)。第一部詩吟詩舞、高岳一會主桑名洲外三十五題、第二部秋田おばこその他六題が何れも踊をはじめ尺八、三絃、太鼓などの伴奏付き披露され、第三部琵琶は静一岩井洲洋・絃洲聖、重衡一初原洲紫・絃同▽月下の陣一中条洲風・絃同▽桜狩一會主桑名洲聖・絃洲楓会同人十名合奏(以下来賓)湖水乗切一荒川洲帆、白虎隊一前田洲月▽吹雪の敵一荒井姿水、座間燦水▽曲垣平九郎一都錦穂▽西郷隆盛一前田洲月▽衣川一原島旭粧・絃押田旭窈▽彰義隊一會主洲聖・絃岡尾鶴城▽河中島一中谷裏水、山口速水・絃館谷六水。以上豪華絢爛の番組構成で盛況。

琵琶ラヂオ放送

四月十三日(休)昼三時十分NHK・FM。木村重成一石坂鶴朋、茨木一押川旭葉両氏放送。

阿部吉州(吉蔵)氏

かねて入院加療中のところ去る一月二十九日急性腸閉塞のため急逝。享年七十四。朝鮮海州師範学校在学中に筑前琵琶を習い教員定年退職後郷里仙台市で芦名道達師、半田錦崇師に師事して薩摩琵琶を習得、後東北琵琶連盟を結成して専ら企画運営を掌り又「支倉常正」「仙台城と伊達政宗」等を作詞作曲して発表するなど東北琵琶界今日の発展に尽くされた功績は大きい。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。(仙台市富沢字上の台十二)尚五月二十日別項予告の通り追悼演奏会が仙台市で開催慰霊される。

(予 告)

- ：京都琵琶協会五月例会 五月七日(日)昼一時會員梅原旭濤女史宅(阪急電車西向日町下車。電話075九三一―一六九二番)
- ：琵琶桑名流大会 五月六日(出)正午東京日本橋東京証券ホール、主催日本琵琶楽協会(千五百円)
- ：菊水流吟詠吟舞大会 五月七日(日)東京浅草公会堂。琵琶鈴木流泉氏応援出演。
- ：薩摩琵琶晴風会春の大会 五月十五日(日)夕五時半東京新宿駅西口際安田生命ホール会主浅野晴風氏(千五百円)。望月啞江、谷暉水氏等応援出演。全十一曲。
- ：故阿部吉州氏追善記念一般慰安琵琶公演 五月二十日(出)十一時半仙台駅前日立ファミリアセンターホール。主催者故人令兄阿部万二氏の外地元琵琶人並びに東京の都錦穂、輝錦凌、輝錦統各氏その他応援出演。

- ：物語琵琶演奏大会 五月二十五日(休)東京上野本牧亭、主催杉山旗水氏。鈴木流泉、若水桜松、浅野晴風、都錦穂、若宮旭登等八氏応援出演。
- ：各流派琵琶合同春の演奏会 六月四日(日)正午京都東山安井金比羅会館(市電東山清水坂下車)。主催京都琵琶協会。

きごとあ

景勝撰津耶馬溪を根元とする高槻市中央貫通の清流芥川堤の桜並木もアツというまに散り果てて世は早くも緑したたる五月の好期節となった。筆者は毎日一時間の散歩を日課としている。芥川堤もその散歩区域であるが赤字転落寸前の高槻市も財政が苦しいためか毎年春には堤の夜桜を楽しむ市民のために設けられる数基のぼんぼりも今春は中止された。●円高ドル安、預貯金々利引下げ、電車賃バス賃値上げ等々、我々庶民には嬉しくない話ばかり、一体世の中どうなっているのかと云いたい。●せめて琵琶でも弾じて一刻を忘れようではないか。

昭和五十三年五月一日発行(非売品)
編集者 植村 真水
発行所 京 絃 社
〒569 高槻市津之江北町一ノ二二三
電話〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二八七号 京 絃 社

戦国時代の女性 (二)

はくすい

薄幸の佳人常盤御前について、前号では一文筆家の、常盤に対する極めて理解ある一文を紹介したが、本号はこれと反対の某作家執筆による、常盤に対してあまり好意的とは解せられない内容の一節を掲載して、読者の判断に訴えたいと思う。

源義経の武勇は有名であるが、その生涯は不幸であった。義経の生涯の不幸は、その出生に影響されているところが無いとは云えないだろう。

義経が、もし兄頼朝と母を同じくした実の兄弟であったとしたら、彼の生涯は可なり違ったものになっていたかも知れない。武將は母の出身によって評価される。頼朝の母が、熱田神宮の大宮司藤原季範の娘であったのに対して、義経の生母は九条院(近衛天皇の皇后)の雑仕女(下級女官)常盤であった。生母常盤の身分の低さと、夫の義朝に死別

してからの身の処し方、生き方が、異腹の兄頼朝に好感を持たれていた筈はない。しかしそれは、頼朝と義経の兄弟仲がうまくいっている間は、取るに足らぬ小さい事であった。一旦兄弟の間に疑念が生まれたとき、不和となったとき、頼朝の弟に対する不信感を助長するものとして、常盤の子だということも一抹の理由になって来たかも知れない。

世に常盤御前と呼ばれる義経の母は、それほど節操のない生き方をしたのであるろうか。彼女は大変美しい女性であった。九条院の下級女官、いわば召使いのような彼女が、源家の嫡流義朝の愛妾となったのも、たぐい稀な美しさの故であった。いわば人の羨む玉の輿に乗ったのである。然しその幸福は長くは続かなかつた。

一一五九年(平治一年)十二月、源義朝は保元の乱の戦功者である自分が、事毎に平清盛よりも軽んじられ、官位恩賞に甚だしく差

異のあることへの不満に堪え切れず、同じく不平を抱く藤原信頼と共に、清盛一族の熊野詣での留守をついて兵を挙げた。このクーデターは一度は成功したかのように見えたが、急を聞いて直ぐ引返した清盛の巧みな作戦によって忽ちつがえされ、義朝は本拠の東國へ逃れんと尾張の国まで来たが、味方と信じられた長田忠致に殺されてしまった。

このとき常盤は、三人の子供を連れて大和の国竜門の里に隠れた。今若七才、乙若五才、牛若一才である。三児を引連れて雪の大和路をさまよう常盤の哀れな姿……。清盛は敵の遺児達を探すために、常盤の母を捕えて糾問した。母の難儀を思ひ常盤は自ら名乗り出て母を救い、三児の命乞いをした。清盛が常盤の願いを聞き届けて三児の命を助けたのは、彼女が余りにも美しかったからだ、とも云われる。その時常盤は二十三才だったと云う。生年没年とも不詳であるから正確には判明しないが、都の美女千人の中から選ばれた女だという話があるのを見て、若く美しかったことは確かである。

三児を救うことは、或いは清盛の愛妾となることと引換えの条件であったのかも知れない、女が男のもてあそびものであった時代である。これは極く自然な成行であったろう。更に云えば、若き日の清盛は朝廷の人々や都の女たちにも評判の良い才人であり器量人であった。夫の仇とはいえ、今や天下の権力を握る清盛が三児の命を助けてくれ、女とし



山川流水

て自分の美しさを愛してくるるとき、常盤が、清盛を頼もしい人として愛するようになるのも、自然な女心と云えないであろうか、当の彼女の子供達にとって、又源氏の人々にとって如何に苦しい事であるにしても...

清盛の妻時子は、夫が常盤を愛して彼女のもとに通い、既に娘一人をもうけていることを知ると、弟時忠と相談して娘は里子に出し、常盤を藤原長成の後妻に世話させた。

常盤としては否も応もない、従わなければならぬことであつた。節操のない女という所しりも又甘んじて受けねばならなかつた。この時代の女性としては、三児の生命を助けられた時、感謝して美しい黒髪をおろし、尼僧になるというのが世間の期待であつた。

大阪夏の陣 (一〇〇)

元和元年(一六一五)五月五日の家康、秀忠の京都出発という情報は、その日のうちにスパイから大阪城にも届いていた。

後藤又兵衛が「さあ、戦いだ。みんな頼むぞ」と二千八百の手勢に進撃の命令を出しているとき、真田幸村と毛利勝永が来た。

「本隊も直ぐ追いかけるから、道明寺(藤井寺市)で合流して夜明け前に国分(柏原市)の丘の向うに進出、谷間の峠から出てくる関東勢をやっつけよう。家康の首を取るか、こつちが討ち死にするか、どつちかだ」と云えば、又兵衛も戦死を誓う。

進出して陣地を敷いているという報告である。関東勢の大和口方面軍は奈良周辺で待機していたが、一番手の水野勝成部隊三千八百が、五日夕方国分に到着したのをはじめて、伊達政宗、本多忠政、松平忠明ら合わせて一万八千八百の兵力が、同夜のうちに国分一帯に乗り込んでいたわけである。

「大日本史料」に収める古文書、文献は小松山と記しているが、夏の陣で勝つたり負けたりとの激戦が繰返されて、勝負山(かちまけやま)が通り名になった。その後勝松山に改名されたといひ、これは徳川幕府の仕業かも知れぬ。激戦地の跡である。

この頂上から東を望めば、奈良県境の葛城山系が正面をふさぎ、その手前一体が国分地区である。足もとから東へ大和川がさかのぼり、これに沿って走る国道25号が国鉄関西線と並んで、龜瀬峠を奈良へと東の谷間に消える。西は河内平野、こんもりと木の茂る小さな丘が多い。道明寺の方向である。

おりから五月とはいへ、新暦では六月上旬、雨期である。湿地帯を避け国分を経て、道明寺一帯に集結しようとする徳川方二つの方面軍にとっては、この小松山はまさに戦況を左右する高地である。だが水野勝成は、ここへ進出せず国分に布陣した。

壺阪寺

旭城



見て、水野部隊最前線の部将たちはカッとなつた。部隊長の指揮を待たずに、功を急ぐ部将たちは山頂目掛けて走り出す。奥田三郎右衛門も槍を構えて突撃すれば、その家来五人も続く。こうなるともう乱戦、混戦で両軍とも勝つたり負けたりの大激戦で死傷者続出。

いま、この山頂に高さ二米余の古い墓碑がある。表に大きく「奥田三郎右衛門」とあり、その下に家来五人の名を刻んで「慶長二十年五月六日」とある。またこの近くに松平忠明の家臣山田十郎兵衛の墓石もある。

勝松山の麓、片山町の旧家益池池性次さん宅の仏壇に奥田三郎右衛門、山田十郎兵衛の位牌が祭られている。どちらも格式の高い〇〇院、〇〇殿、〇〇居士の戒名がつく。

益池家の先祖益池喜兵衛は、奥田三郎右衛門の家来で大阪合戦に従軍した。この戦後から現在地に住み、幕政中期から明治維新まで大庄家で、旧主家の墓地を管理していた。益池家には小松山夏の陣所見取り図と、益池喜兵衛署名入りの戦況報告の古文書が残っている。語り伝えによると、小松山戦闘の直後現地で軍評議が開かれたとき纏めたものと云い、まづは従軍記ともいえるよか。

妻の道、夫の目をば治さんと、壺阪寺に願をかけ、嶮しき山路ただ一人、はだし参りの三とせ越し、それとは知らぬ沢市の、あらぬ疑い今晴れて、今宵お山へ二人連れ、杖にすがらせ登りゆく、貞女の姿ぞ健気なる...

もう七、八年にも前になるだろうか、紋友石橋旭嶺君と琵琶界の花形久世旭禅先生に「筑前琵琶壺阪寺」を教わつたのを思い出す。旭翁新曲が出る前、壺阪寺は夫婦愛のシンボルになったのが人形浄瑠璃「壺阪靈験記」で、明治大正時代の人にはよく知られている。

この人形芝居が上演されたのは江戸時代のころで、全国の芝居小屋ではこの芸題が公開されるとたいへんな人気を呼び、各地から眼の悪い人たちが壺阪の山寺は、紀州熊野の蟻詣でそのまゝのように続いたという。

明治維新になってからも、夫婦の愛情に革命はなかつたので、江戸末期と変らず観音信仰は衰えをみせなかつた。こうした流れは大正から昭和、そして戦前までも続けられた。筆者は取材するため、近鉄阿倍野駅から吉

野線に乗り込み、壺阪山駅で降りて、駅前から高取町の旧城下町を抜ける。高取山は町の東南方にそびえ、山頂は天然の要塞地となつていて、古城の跡がある。

吉野時代には土豪越智氏がここに居城を構えていたが、のちに越智氏は絶え、慶長五年(一六〇〇)徳川氏がこの城を本多俊政に与えた。ついで寛永十七年(一六四〇)植村家政がこれに代って二万五千石を領し、子孫相継いで明治維新までつづいた。現存の遺跡はおもに植村氏が築いたもので、城壁は長く老松の間に連なり、本丸その他の石畳がよく残されている。

旧城下町を南に抜けると、上り下りの幾つもの坂がある。四ッ辻に「右つぼさかから」の大きい石標がある。商店の意気な看板がなかつたら、江戸時代を凍結したような城下町である。

長屋門、白壁、格子、一階白壁の浮彫り、街の両側は小さい溝になって、山からの美しい水が走っている。古墳のたくさんある越智氏の丘陵の見える池畔には、昔から壺阪まいりの善男善女を得意客にした茶店や旅館が、軒を並べていた。その台地には桜の巨木があつたり、池畔にも桜並木があつて、小さな花見どころにもなつていた。今も鯉料理を名物にする料理店がある。

けるこのあたり、城下町は武家屋敷、商家など面然としていたらしい。いまもその面影が消えていない。

この池畔からボツボツ急坂を下りはじめ、その下った点が清水の谷で、広い国道沿いに壺阪寺のバス停があった。バスが走るこの参道は、明治以後のいわば新道で、谷底に見え隠れするのが旧道だという。

朝廷も発言できなかったほどの権勢を、思うままにした藤原道長が、ようやく道長政治の傾斜に気づいた世の怨みは、声なき声として道長を襲った。末世の怨念を避け、神社に加護をもとめる「吉野詣で」のとき、道長は奈良に一泊して下ッ街道を南に、第二泊の宿を壺阪寺にとった。翌朝は本堂で祈禱を受けて吉野に入り、初の潔斎をした。女人も交えたであろうVIPの行列は、さぞ華やかであったろう。

壺阪寺をのぼると、右吉野、左高取城跡のハイキング道標がある。吉野へ山道を行くと二キロほどで古寺世尊寺に出る。このことは「御堂関白記」が物語っている。

壺阪寺は山の台地を利用して、堂塔の点在した画のような美しい寺で、境内をとりまく千年杉がよく古寺の歴史を教えている。

本堂横の台地は切りたつた崖上で、ここが「お里沢市」の飛び込んだ場所である。参詣の人たちは、必ずここから谷底をおそるおそるのぞき込んで合掌する。

寺務所で「壺阪靈験記」について聞いてみ

た。それによると、観世音の靈験を脚色した浄瑠璃や歌舞伎劇で、西国三十三観音靈験の中に壺阪寺の段というのがある。それは、寺の近くに沢市という座頭が居て、美しい妻のお里が夜ふけて家を抜け出すのを、ほかに男が出来たものと思ひ、ある夜ひそかにそのあとをつけたところ、夫の眼を治そうとこの観音に祈願をこめて、かよっていったことがわかり、申訳ない寺の裏の谷に身を投げた。それを知ったお里もあとを追って飛びおりた。すると不思議にも観音様の靈験によって二人の命が助かり、沢市の眼が開いた。これが四方に伝わって、ますます観音信仰が盛んになったという。

現在壺阪寺には、眼を失って世間から見離された老人に、暖かい手をさしのばす施設がある。また全国的话题になった「匂い花園」や「音の図書館」などがあるが、世想が変って来た現在だけに、経営に苦勞しているといふは話していた。



唐詩 涼州詞

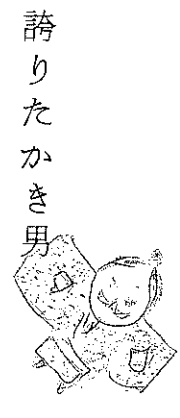
王翰

葡萄美酒夜光杯
欲飲琵琶馬上催
醉臥沙場君莫笑

古來征戰幾人回
葡萄美酒夜光杯
飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す
酔ふて沙場に臥す君笑ふこと莫かれ
古來征戰幾人か回る

楽府題を用いて北辺征伐の情況を叙したものである。涼州は唐の西北、塞外の地。兵士の心境を写して無限の哀情を含めた傑作であり、唐代七絶の第一と評せられている。「葡萄」は葡萄、蒲桃とも書き、ギリシャ語の音訳で初めギリシャから西域に伝わり、漢の武帝の頃、中国内地に移植せられたものであるが涼州の地が良質の葡萄酒を産し、楊貴妃が西涼の葡萄酒を七宝の杯で飲んだという。玉杯の美酒、馬上の琵琶、荒涼たる塞外の沙漠、そこに痛飲酔臥する將兵、表面に悲しみを言わずして、意は悲しいものがある。(註)

王翰(七三一頃在世)
山西の人。少くして豪邁、才を恃む。
張説を助けて政にあずかったが坐して左遷された。(鴨水)



誇りたかき男
編集部

道長恐れず 堂々と対決

王朝の貴族といえは、柔媚軟弱の人、という印象が浮かびます。

また事実、藤原道長の全盛時代の貴族たちはそうでした。彼らは、天下第一の権力者道長の前に屈伏(しようふく)し、彼の意を迎えるのにけんめいでした。

ところがその中でただ一人、道長を恐れず、堂々と対等に渡り合った、気骨ある男がいました。それは、かの「薄幸の皇后」定子の宮の弟にあたる、権中納言・藤原隆家卿です。私には、この隆家が、とても男らしくて魅力があるのです。

この時代のことを書いた、歴史物語「天鏡」は、権力の座をめぐる争う高級貴族たちの性格を一人一人、じつに巧みに書きわけ、凡百の小説の及ばぬ、すぐれた面白さをもってします。

隆家は若い時から、やんちゃ若様、あばれん坊貴族、と云われた青年でした。兄の伊周(これちか)は、それに反し、おだやかで心やさしく、優柔不断な貴公子だったようです。この兄弟の人生のスタートは、かがやかし、恵まれたものでした。

父の、中の関白・道隆は天下第一の人として世に君臨し、兄弟は若くして高位高官にすすみました。姉の定子皇后は、一条帝のおんおほえもめでたく、のちには第一皇子敦康親王さえ、御生誕になったのです。ゆくゆくは次代のみかど、そうなれば、伊周・隆家兄弟は、天皇の外戚、天皇のおん叔父として権力

をふるえる、それが一家の政治的写真でし

父関白死に 没落の悲運

思いのほかの事態が出来(しゅつたい)しました。父の道隆が死に、そのあとの権力の座を当然、長男の伊周がおそう所を、父の弟、道長にさらわれたのです。道長はこの日を、虎視眈々と待っていたのです。伊周兄弟は忽ち権力の座から蹴落とされてしまいました。あまつさえ、頼みにする定子皇后は世を去られ、新しい皇后は、道長の娘・彰子でした。どこまで道長は運がつよいのか、彰子中宮には、つづけて皇子が二人も生まれられたのです。

兄の伊周は、気の弱い男らしく、皇子誕生の喜びにわく道長邸へ、のめめと、お祝いに出かけたりしています。

隆家は、さぞ、そんな兄を、齒ざりしてくやしがつたことでしょう。伊周は、道長にあえば、いつも貫録負けして、おしげつき、他愛ない勝負ごとをさえ、わざと負けたりする人でした。

しかし隆家は、決して政敵に弱味を見せないのです。彰子中宮の生まれた皇子が皇太子となられ、彼ら兄弟が、皇室の外戚となるチャンスをつかたときも、隆家は毅然としていました。宮中の儀式には却って美々しくよそおい、世人の目をおどろかし「いとめでたく、けららに

こそ、きらめかせ給へりしか」と感嘆させるありさま、隆家の心には(何くそ、まけるものか)という負けじ魂が烈々と燃え立っていたのです。

そういう隆家を、政敵の道長も、一目おきました。道長邸での宴会には、必ず隆家を呼び、一座が乱れている所へ、おそく来た隆家がかしこまっていると、貴族の一人がなれなれしく、今夜は無礼講ゆえ、着物の紐をおとさなされ、と手をかけます。それは隆家のプライドを刺激しました。自分は、悲運の内にあっても、そんな扱いをされる身ではない、と荒々しく、いい放ちます。あるじの道長は、あわてて、では私みずからお着物の紐をとこり、どうぞ、お楽に、といい、隆家をなだめるありさまでした。天下第一の権力者がきげんをとったのです。

逆境の中で 男の心意気

「いみじう魂おわすとぞ、世の人に思われ給へりし」
そんな隆家ですから、不遇の時代も、門前には訪問者がたえなかつたといひます。目を患ったのは三十代なかば、その治療をかねて赴任した九州で、隆家は、さらに大きな事件にありました。刀伊(とい)という賊の来襲です。彼はこの賊を撃退し、あとの処置も適切に講じ、その政治手腕はすぐれたものでした。
隆家は悲運にくじけず、誇りをもって生

きぬきました。定子皇后が、薄命ながら背の君のみかどの愛を一身にうけて亡くなられたのを、女の命の華とすると、弟の隆家も、逆境にあつて意地をたて通し、男の花を咲かせたといえるでしょう。

(田辺聖子氏「文庫日記」より)



錦心流琵琶 加茂の春雨

(演奏時間十四分)

燃え立つ紅の鹿の子染め振袖袂やだらり帯 祇園の花に香り添え 煙る春雨丸山に 乱れて咲きし夜桜や 入まさる風情かな 濡れて帰りの月形が 舞妓雛菊に見送られ 酒の機嫌の酔い心地

加茂の瀬々らぎキラキラと映るぼんぼり影絶えて都大路の夜は更けぬ

しかと姿は見えねども鳴く音もいと千鳥足 「月さま 雨が...」 「春雨ちや 濡れて行こう」

荷明大義正人心 皇道笑患不興起 そよ吹き送る川風に 乱るるびんのほつれ毛も 二た筋三筋四条橋

夢を醒ましむまもなく斬りかたは電光石火 しじまを破る剣撃の 音も程なくと絶えて 雲間を洩るる月影に 浮かぶ墨絵の東山 斯心奮発誓神命 古人曰斃而後己

馬場鴨水、田中颯水、梅原旭濤、矢吹旭美津、牧雨水、植村寛水の六氏が得票多数でそれぞれ就任を承諾、決定した。 夕食後春の演奏会につき協議の結果六月四日(日)東京都東山安井金比羅会馆に於て開催することに決定、八時半開会した。

京都琵琶協会の総会

龍吟同好会二月例会

四月二日(日)昼一時から月例会を兼ねて本部平井春嶺氏宅で開催。何となく肌寒さを感じさせる生憎の春雨をついて、風邪など数氏の事故者を除き左記十三名が出席。二、三会員の研修演奏のあと前月から持ち越しの本年度総会に移り宿題の会則制定が論議され詳細検討の上可決された。これにより決定した会則は近く印刷して本部から全会員や関係者に配布されるが、この内二、三の要点を挙げれば

二月二十六日(日)昼一時一六時東京新宿州風会馆(千円)。琵琶吟詠数題発表の外、琵琶楽器の調整(サエ取りなど)一鈴木流泉漢詩雑談一望月啞江両氏の奉仕があり出席者を喜ばせた。

晴風弥生演奏会

①従来は理事の合議によって運営されていた本協会は今回会長制を敷き又若干名の役員(理事、監事)を設けて今後一層の協会発展を計る。②正会員の外新たに準会員、特別会員、賛助会員の制度を設ける。③今後正規の手続を終えて新たに入会した人は所定の入会金を納める。④六ヶ月以上会費を滞納した者は退会者と見做す、など。

三月十一日(日)夕六時一九時東京杉並区高円寺会馆(会長浅野晴風氏)。旅一晴風城山一佐藤一櫻狩一竹内一屋島の誉一太田尾桜風一吟我日本を愛す一伊藤香風一噫八甲田山一中山礼風一絃諸遊晴風一橋大隊長一本橋錦颯一仁科信盛一野口嶮水一菅公一望月啞江一小栗栖一福島脹水一大物の浦一太閤英子一三方ケ原一高田栄水一羅生門一杉山稚俊一茨木一山下晴風。

引続き当日の出席全員により会長並びに役員を無記名投票の結果、会長平井春嶺、役員

一水会・武絃会合同例会 ①二月十九日(日)昼一時小金井市福祉会館。

(事務所伊藤警水氏方)。月下の陣一伊藤静效一湖水乗切一小山羽水一井伊大老一篠宮優水一吹雪の敵一高杉洲靖一舟弁慶一加藤錦陽一雪晴れ一石井效水一別れの盃一小川吐水一白虎隊一清水源城一松の廊下一伊藤警水一伊豆の御難一中村修水一佐野の雪暮れ一伊集院殿一舟弁慶一坂本錦道。以上演奏のあと乾盃、七時散会した。

四月二日(日)昼一時半名古屋市中須中小企業福祉会館、主催龍吟会。桜井の駅一井村一菅公一伊藤嘉水一井伊大老一小林典水一櫻狩一岩間寛水一武蔵野一太西弦水一西郷隆盛一丹野鮎水一小栗栖一三輪花水一石童丸(下)一小林残水一義貞参内一神藤政水一竜の口一奥村憲水(以下賛助)新撰組一神戸揚嶽水一毒饅頭一蒲郡吉見白水(以下来賓)教盛一京都木下皇水一紅葉狩一名古屋吉田旭蓮一屋島の誉一相模原反町昇水一羅生門一豊橋田中訴水一宇治川先陣一會長水谷浩水。

一添田国柔一城山一斉藤穂嶺一捨子一藤原穂静一絃錦穂一井の内侍一甲山欽水一井伊大老一都穂鳳一勿来の関一太知里穂仙一新撰組一太場穂苑一慕情静の舞一会主都錦穂一秋海棠一輝錦葉一修善寺物語一杉山旗水一絃錦穂一北の庄一藤巻旭鴻一熊野一穂静、穂鳳、穂苑。

②三月十九日(日)昼一時同所。月下の陣一伊藤静效一湖水乗切一小山羽水一滝口入道一坂本錦道一横笛一小川吐水一乃木静子夫人一伊藤警水一須磨の春一石井效水一彰義隊一清水源城。以上研修、乾盃の後散会した。

四月九日(日)朝十時舞坂町民センター、一水会豊橋支部・薩摩鶴絃会共催(豊橋)菅公一木下一月下の陣一磯部一白虎隊一木下一城山一田中一屋島の誉一小川一井伊大老一小林典水一野田の笛一山本宝水一戦艦大和一石黒石水一川中島一吉見輝水一義貞参内一神藤政水一敦盛一支部長田中訴水(浜松)五条橋一桐生一壇の浦を過ぐ一小野一遠州洋を行く一大場一母の教一石川一広瀬中佐一佐野一輝丸一秘曲護り一松木一虞美人草一石川一弁財天一

四月九日(日)昼一時東京豊島区高三会館、主催日本琵琶楽協会(五百円)。彰義隊一大塚岳峻一耳なし芳一木原綾子一山内一豊の妻一宮武旭豊一良寛一高田栄水一新曲本能寺一石坂鶴朋一講演一NHK岡地博先生。

日本芸術琵琶会・筑前琵琶旭登会合同の例会が三月十九日(日)昼一時東京西新宿の柏ビル六階で開催され門徒その他弾法一錦幽一俊寛(上)一坂入俊風一本能寺一加藤錦陽一三高地一長岡旭玲一異国の丘一山崎錦幽一設楽ケ原一青木早水一名残の緒琴一平田旭舟一昨夜の良寛一山本隆水一五条橋一橋本草水一小曲隆盛一錦幽一川中島一杉山旗水一津軽山歌一客員武士外垣先生。以上研修を終り六時半散会。(高田栄水、若宮旭登両氏欠席)。

四月九日(日)夕五時東京上野本牧亭、主催錦穂後援会(七百円)(会長都錦穂女史)。月下の陣一鈴木穂正一白虎隊一佐々木穂紅一丸田穂容一扇の的一青木穂英一吟詠名槍日本号

四月九日(日)夕五時東京上野本牧亭、主催錦穂後援会(七百円)(会長都錦穂女史)。月下の陣一鈴木穂正一白虎隊一佐々木穂紅一丸田穂容一扇の的一青木穂英一吟詠名槍日本号

三位研修同志会例会 第四十二回の例会を三月十九日(日)昼三鷹市上蓮雀公会堂で開催。滝口入道一坂本錦道一武蔵野方丈記一伊集院殿城一潯陽江一八束一

都派琵琶春の公演 四月九日(日)夕五時東京上野本牧亭、主催錦穂後援会(七百円)(会長都錦穂女史)。月下の陣一鈴木穂正一白虎隊一佐々木穂紅一丸田穂容一扇の的一青木穂英一吟詠名槍日本号

かねて近頃琵琶人の間の親睦を念願して浜松小野鶴彦、豊橋田中訴水両氏の間で話合い中のところ今般機熟してその第一回演奏会を両市の中間に位置する景勝の地で上記の通り